



2004年1月発行

たぐいなき神の愛

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。」

(ヨハネによる福音書 3:16~18)

ヨハネによる福音書3章16節の言葉は、ゴールデン・テキストと呼ばれ、古来、聖書中最も尊ばれてきた聖句です。マルティン・ルターは、これを「福音のミニチュアだ」と言いました。福音のすべてが、ここに凝縮して詰まっている、と言う意味でそう言ったのです。たとえ聖書が地上から無くなったとしても、ただこの一句さえ残れば、神の愛の何たるかを世に伝えることが出来ると信じたのです。

ルターはこうも言いました。「もし私が神であったなら、こんな悪しき世を、粉々に砕いてしまっただろう。だがしかし、神は、こんなにも愚かで、大間違いを犯し、頑なで、罪に病んだこの世を愛されたのだ」と。それも、尋常一様の愛し方ではなかったのです。「その独り子をお与えになったほどに」と言われているように、最愛の独り子を、神に敵対するこの世のために、と言うことは、つまり私たち一人ひとりのために、惜し気もなく差し出して下さったと言うのです。沢山いる子供の一人と言うのではないのです。独り子と言うのは、自分の唯一の分身、正に掌中の珠と言うに等しく、それを愛の保証、確かな愛の証明のために、差し出すのです。それも、日本の戦国時代によくあった、忠誠の証しとして、子供を人質として差し出す場合のように、他から強いられて、止む無くと言うのではなく、自ら進んで差し出すと言うのですから、これほど大きな愛の証しは外に考えられません。それがイエス・キリストの誕生、十字架、復活、昇天と言う、一連の具体的な事件を通して起こったことだったのです。

神の愛と言うのは、抽象的で漠然としたものではなく、実に具体的、現実的な、一つのこの世の出来事として起こったことで、あらゆる偏見を去って、虚心坦懐にこれを見るならば、誰も否定することの出来ない、決定的な歴史的な事件であったのです。このことに目が開かれますと、最早どんな場合にも、私どもは、神の愛を疑うことが出来なくなります。そしてパウロと共に、私どももまた、何の躊躇いもなく、ごく自然にこう言えるようになるのではないのでしょうか。

「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまずに死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか・・・わたしたちは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」(ローマ8:31~39)、と。

神の御意図は、何処までも世を救うことでした。ところが不思議な話ですが、これによって裁きも同時に明らかになったのです。裁くのは、神ではありません。人間が、自分で自分を裁くのです。「裁く」と訳されている元の字はクリノーで、その本来の意味は、「分ける」、「選ぶ」と言うことなのです。折角神がその独り子を世に遣わして下さったのに、人間の側で、これを選ぼうとせず、こんな者は大した者ではないと判断を下して、これを捨て、結果に於いて、光ではなく闇を選ぶことにより、自らの手で自らを裁くのです。

とは言っても、それで神の愛が消えてしまうわけではありません。人間が信じようが信じまいが、神がこの世を愛しておられると言う事実には、何の変化もないのです。光は闇の中に輝いているのです。そして闇がこれに打ち勝つことなど、金輪際あり得ないのです。

牧師 三輪恭嗣

(2003年12月14日の主日礼拝の説教より)